

1. 研究計画・目的

本研究は、20 世紀中葉以降の核兵器廃絶運動において、日本とアフリカ諸国が果たした役割とその相互関係、さらには両者の運動の変遷について、歴史的文脈および記憶文化の観点から再検討することを目的とした。特に 1950～60 年代の「原水爆禁止世界大会」や「爆弾なき世界のためのアクラ会議」などに見られる国際的連帯の軌跡を再構成するとともに、1990 年代以降、南アフリカが核兵器を自主放棄し、アフリカ非核兵器地帯条約（ペリンダバ条約）の採択・発効に至るまでの外交的および社会的背景を検証する。

また、本研究は冷戦構造のなかで展開された非同盟諸国間の平和ネットワークを、日ア関係史の視点から照射する試みでもある。これまで日本において反アパルトヘイト運動を除き、アフリカの核軍縮外交や市民運動との連関はあまり注目されてこなかったが、本研究では両者が共有した脱植民地化の理念、アジア・アフリカ連帯、核をめぐるアジア・アフリカ世界の言説空間などを読み解く。歴史的文脈に即しつつ、展示や記憶という視点も導入することで、本研究は理論的にも応用的にも重要な位置を占めることが期待される。

上記に関連して、研究の第二の目的として、核をめぐる記憶の継承や運動の表象が、現代アフリカ社会においてどのように展示や公共空間に体现されているかという点に注目した。すなわち、平和運動や非核化の理念が、記念館・博物館等の文化施設を通じていかに社会に語りかけているかを、展示実践の分析を通じて実証的に明らかにすることも本研究の課題とした。

2. 研究活動

2024 年 12 月 8 日に日本を出国し、調査準備のためスイス・チューリッヒに短期滞在した後、12 月 09 日に南アフリカ・ヨハネスブルクに入国した。現地ではアパルトヘイト博物館および Constitution Hill を訪れ、展示内容、アーカイブ資料、施設設計に関する記録を行った。

12 月末から翌年 1 月初旬にはガーナ・アクラに滞在し、ガーナ国立公文書館(PRAAD)での文献調査に加え、W.E.B. Du Bois 記念センター、Kwame Nkrumah 記念公園、ガーナ国立博物館などを訪問した。アクラ会議に関する資料収集のほか、独立運動や反核運動の歴史が、どのように国民的記憶として展示・保存されているかを調査した。12 月下旬にはアクラで PRAAD の調査部門担当者と面会し、今後の調査方針について意見交換をおこなうことができた。

2025 年 1 月中旬以降は再度南アフリカに渡り、ステレンボッシュ大学付属図書館での史資料調査に加え、ケープタウン、ステレンボッシュ、ダーバン、ブルームフォンテンなどの各都市で地域博物館や歴史資料館を訪問した。とくにステレンボッシュ大学日本センターにおいては現地研究者との意見交換の機会を得、同大学図書館所蔵の史資料の閲覧と記録を行った。また、西ケープ大学図書館附属「マイブイエ文書館」にも訪問し、反アパルトヘイト運動関連の展示内容を確認した。

ケープタウンでは District Six Museum や南アフリカ国立博物館、Slave Lodgeなどを訪問し、アパルトヘイトおよび植民地支配に関する展示手法を比較検討した。ブルームフォンテンでは、国立博物館内に設置された戦争記憶関連セクションの他、Boer War Memorial など屋外の記念施設にも注目し、空間と記憶の交錯を観察した。

1 月末には、ダーバンおよびクッドゥズカを訪れ、ズールー王国の歴史に関する展示や、シャカ・ズールーを顕彰する地域資料館を調査した。また、2 月中旬に訪問したブルーム

フォンテンでは、アフリカ民族会議（ANC）発祥の地とされる Waaihoek Wesleyan Church を訪れる機会を得、付設の展示館における歴史展示を調査した。

各都市間の移動は航空機・鉄道・長距離バスを用いて行い、その途上でも地方都市の資料館や地域展示を確認することができた。3 月にはケープタウンおよびヨハネスブルクに再滞在し、展示記録の整理と写真資料のキャプション付けを進めながら、研究論考の執筆に取りかかった。滞在終盤には、研究報告の準備を進め、帰国後の学会発表に向けた構想をまとめるに至った。

3. 研究成果

今回の調査により、平和運動や核兵器廃絶運動が、アフリカにおいてはナショナリズム運動や市民社会運動と強く結びついていた一方、日本においては 1970 年代以降その社会的基盤が後退し、国際的連帯が希薄化していった歴史的過程が再確認された。また、ガーナや南アフリカの展示実践を分析することで、核廃絶の理念が、単に外交政策や条約にとどまらず、「公共の記憶」として社会に内在化されていることが明らかとなった。

南アフリカの博物館では、ズールー史や南アフリカ戦争に関する展示も含め、複数の地域資料館で市民レベルの記憶継承の努力が見られた。こうした展示実践の差異は、国家の歴史観や記憶政治に深く根差しており、その比較分析はポストコロニアルな記憶文化の研究において有益な知見を与えるものであった。

今回の調査では、複数の記念施設における記述パネル、映像資料、音声ガイド、館内揭示物等の収集・記録を実施し、歴史展示が視覚的・空間的にいかに構成されているかの分析を可能にした。特に、展示の構成と空間設計との関係や、来館者の導線・動線的设计思想に着目することで、「歴史の語り」がどのように誘導・共有されるかという観点からの検討が可能となった。

さらに、展示が市民教育や国家的アイデンティティ形成に果たす役割に着目し、各施設の理念や運営方針にも注目した。たとえば、Museum Africa など南アフリカの一部施設では、訪問者が記念のメッセージを自由に残す空間が設けられており、「展示の受容」に関する実証的データとしても興味深い材料となった。

上記に加え、本在外研究の期間中には、並行して以下の学術的執筆・編集活動を実施した。まず、『帝国主義事典』（丸善出版、刊行準備中）に収録予定の担当項目の原稿執筆と校閲を行った。また、共著書『ガーナを知るための 57 章（仮）』第 2 版（明石書店、2025 年刊行予定）に掲載予定の担当章に関しても、現地調査の成果を反映した形で原稿を執筆し、編集者との連絡調整を進めた。こうした作業により、ガーナおよびアフリカ諸国の現代史・記憶文化に関する知見を、より一般向けにも共有可能なかたちに整えることができた。

また、これまで継続して進めてきた第二次世界大戦期の日本とアフリカの関係に関する研究の一環として、在外研究中には、当時の日本の新聞・雑誌、旧日本軍の陣中日誌、ならびに戦後の退役軍人による回想録等に出する「アフリカ人兵士像」について資料分析と考察を進めた。その成果は、「Japanese Perceptions of African Soldiers in the Second World War: Insights from Wartime and Postwar Writings and Memoirs」と題する英語論文に結実し、査読のうえ、2025 年 3 月 31 日付で『明治大学国際日本学研究』第 17 巻第 1 号に掲載された。この論文は、日本の戦時言説において「アフリカ人」がいかなる形で表象されていたかを分析したものであり、今後の比較文化研究の一端をなすものと位置づけている。

研究期間中に収集・整理した資料をもとに、現在、アフリカの脱植民地化と核廃絶運動に関する英語論文を執筆中であり、国際学術誌への投稿を予定している。また、ステレンボッシュ大学との連携を活かし、今後は共同ワークショップや国際会議での共同発表の機会を探るとともに、アフリカの文脈における「核の語り」の比較史的理解をさらに深めていく方針である。

4. 今後の展望

本研究では、20 世紀中葉以降の核兵器廃絶運動において、日本とアフリカ諸国が果たしてきた役割とその相互関係を、歴史的な文脈および記憶文化の観点から再検討することを目的とした。とりわけ 1950～60 年代の国際的な連帯の軌跡をたどるとともに、1990 年代における南アフリカの核兵器放棄や、アフリカ非核兵器地帯条約（ペリンダバ条約）の発効に至る過程を対象とし、外交的・社会的背景の分析を進めた。また、ガーナと南アフリカにおいては、現地の展示実践や記念施設に注目し、反核運動が市民社会にどのように可視化・記憶化されてきたかを調査し、核兵器廃絶をめぐる理念が公共空間の中でどのように体现されてきたかを明らかにした。

これらの現地調査を通じて、展示空間における語りの構造、館内動線や設計理念、来館者の受容のかたちといった視覚的・身体的体験の要素を含む記憶文化の分析が可能となった。また、日本とアフリカにおける平和運動の変遷を比較することで、脱植民地化の思想や反核・反戦運動の言説が、地域的な文脈といかに結びつきながら展開してきたかを検討するための視座が得られた。今後は、こうした展示実践と記憶文化の比較分析をより深めるとともに、核廃絶をめぐる社会運動の歴史的展開を日ア関係のなかで捉え直す作業を進めたい。

加えて、2025 年度より採択された科研費・基盤研究 C「1950 年代のアジアで展開されたアフリカの脱植民地化運動と日本の関与」との連携を通じて、1950 年代にアジアで展開されたアフリカ独立運動に対して、日本人がいかなる関心や関与を示していたのかを明らかにする研究も進めていく。日本はアフリカ諸国とは異なり植民地支配を受けた歴史を持たないが、戦後の占領経験やアジア的立場を背景に、アフリカの脱植民地化運動に共鳴を示した日本人政治活動家や知識人が存在した。今後は、彼らの思想的基盤（反帝国主義、アジア主義、平和運動など）を検討しつつ、アジア・アフリカ間における理念的・運動的な交差をより立体的に捉えていく。

さらに、1953 年のアジア社会党会議における日本社会党の渡辺朗と、ガーナの J.マーカム、ナイジェリアの N.アジキウェ、ケニアの J.ムルンビラアフリカ諸国の政治活動家との人的交流を実証的に分析することで、「第三世界的連帯」がいかなる政治的・文化的前提のもとに構築されていたかを明らかにしたい。また、従来の「日本から見たアフリカ」研究に加えて、アフリカ人の視点から日本がどのように理解・評価されていたのかを、演説、書簡、回顧録などの一次資料から丁寧に読み解くことで、非ヨーロッパ圏同士の関係性を再構築する視角を提示していきたい。

5. 教育への効果

今回の在外研究を通じて収集・撮影した資料および展示記録は、「世界のなかのアフリカ A/B」「アフリカと近現代世界 A/B」「国際日本学部特別講座 A/B」等の学部専門科目において、具体的な教材資源として活用可能である。とりわけ、展示空間における記憶の

構築や、歴史の政治性を可視化する実例として、図版や現地観察に基づく内容は、抽象的な概念を学生に具体的に理解させるために極めて有効である。

さらに、2025 年 7 月には政治経済学部主催の「共通講座Ⅰ」において 2 回分の講義を担当予定であり、その中で、第二次世界大戦とアフリカ諸国の関係、ならびに 20 世紀中葉のアフリカにおける核廃絶運動の展開について、今回の在外研究で得た知見を反映させた内容を講義する計画である。この機会を通じて、学部横断的な教育実践を実現し、幅広い学生に対してアフリカ研究の意義とグローバルな歴史認識の可能性を提示することが期待される。

また、現地でのフィールドワーク経験に基づいた講義展開により、学生が歴史や記憶を「他者の問題」ではなく、自らの世界認識の一部として捉える視座を養うことが可能となる。今後は学生の関心を喚起する短期研修プログラムの構想も視野に、教育と研究の連動を強化していきたいと考えている。